

半世紀前の悲劇

福岡市博多区 後藤 光秀

私は昭和3年11月2日、満州（現在の中国東北部）奉天市（瀋陽）に生まれた。

当時は、日本人を激しく排斥する不穏なさなかで、暴漢や馬賊が出没していて、在住日本人は不安な日々を送っていたという。生まれた年の昭和3年6月、中国軍閥の総帥、張作霖が奉天郊外で列車もろとも爆殺されるなどの事件があった。

昭和6年9月には、奉天郊外柳条湖で鉄道爆破事件が口火となって、満州事変へ突入していった。

昭和7年3月、満州国建国宣言の発表があった。その後も昭和12年頃までは、小学生の郊外遠足には必ず騎馬警官の護衛があったように、まだ満州国では治安が悪かった。

昭和12年、日中戦争が始まる。この頃からは日本軍の戦勝が続いて、治安は好転し不安のない生活が続いた。

昭和16年、太平洋戦争（第2次世界大戦）が始まる年に私は中学に入学した。そうして学校教練で明け暮れる中学3年生の頃から日本軍の敗戦色濃く、勤労奉仕に続き4年生の昭和19年には学徒動員となって、陸軍の兵器補給部隊で兵隊達の補助員となり、共に起居し作業に従事することになったのである。

50年前の終戦を前後に、16、7歳の少年であった私が体験したことは、学徒動員、空襲、終戦・引揚げなどの苦難の連続で、現代の若人が経験して欲しくないことばかりであった。戦争は天災と全く異なり、戦争は人が作る最悪事で国も人も亡ぼすもの。生物にとって平和こそ最大の幸せであることを強調したい。また現実の悲惨さは文章や言葉で表現できない恐ろしい悲惨なものであることも…。

○終戦前の学徒動員

昭和19年12月、満州国奉天市に満州飛行場があって、その隣接した兵器補給廠879部隊で、16歳の私たち中学4年生が学徒動員に従事していた。

部隊の兵舎で、兵隊と同様に起床ラップから消灯ラップ、食事も同じものであった。私はある夜、木製の寝台を踏み外して左足親指の生爪を剥がし、数日間午前中医務室通いをしていたとき、米軍B29による初の満州空襲があった。突然、空襲のサイレンが鳴り響き、医務室の人々は専用の防空壕に避難した。

「ヒュル、ヒュル、ザーッ」空を切る無気味な音の後、「ズシン、ズシン」と地響きが続く爆弾の投下…。やがて「敵機去る」のサイレンで、地上に出て担当の作業工場に走った。胸騒ぎの通り工場周辺は爆撃され瓦礫が広がり、残る焼夷弾の青白い硝煙の中に、人や馬の焼死体が転がっていた。しかも、同級生で修理班に配属されていた全員が焼死していた。

生まれて初めての悲惨な場面に、ただ夢遊病者のようにガタガタ震えながら遺体探しをした。

その日の夕食のおかずは肉料理であったが、昼間の焼死体や肉片を思い出し箸はつけられなかった。その夜は靴をはき、ゲートル（巻脚絆）を巻き着のみ着のまま寝た。むごい学友の遺体を思い出し、恐ろしく一睡もできなかった。

○終戦

昭和20年6月頃、満州在住の日本人青壮年たちに、次々と召集令状がきて各地に結集した。しかし、兵隊とは名だけで兵器は持たされず、スコップなどの作業用具で連日のように壕掘りをさせられたという。その頃、私の兄である光輝は数え年19歳で召集されたが、間もなく終戦となった。兄は、そのまま中国八路軍に捕られて国府軍との戦いで転戦させられた。（※兄は昭和24年に中国から香港経由で、戦病死した旨の文書と遺骨の一片に加え、兄の所持金だった香港ドル千円ぐらいを送ってきた）

昭和20年8月15日、天皇陛下の玉音放送があった。遠い満州だったせい、雑音が多くて声が低く、よく聞きとれなかった。敗戦だとわかった者、耳を疑って敗戦ではなく単なる停戦でまた戦うのだと武装した兵隊たちで混乱した。

一方、民間人は不安におののくばかり、持ち金の底がついた人は売り食いしかない。そのうちに日本人の財産を狙う中国人の暴動が始まった。夜になると1000人もの集団が凶器を持って、叫び声をあげ津波のように日本人街へ押し寄せ、家の畳まで持ち出し放火する。私は火が近くまで迫ったときは、『もう駄目だ。最期だ…』と覚悟したことが何度もあった。

○ソ連兵

ソ連軍は、昭和20年8月終戦と同時に中国軍より、いち早く鉄道を確保して満州南部に侵攻してきた。ソ連軍の先鋒は囚人部隊で、ボロ服をまとった強盗、強姦、人殺しの集団、欲しい物は自動小銃で威嚇射撃をして脅しとり、反抗する者は射殺した。

日本人達は窓や玄関に厚い板を打ちつけ、ソ連兵の家宅侵入を防ぐと同時に女性は頭を丸刈りにするなど男装をした。また、万一に備えて屋根裏に逃げる訓練を重ねたりした。

「ダワイ！」。ソ連兵は「くれ！よこせ」と叫び、自動小銃を突きつけて強奪するから、腕時計や金目の物は持たずに外出する。ある日、私は「ダワイ！」と自動小銃を突き付けられた。いつもと様子が違うと思ったときはすでに遅く、近くに停めていたトラックに乗せられた。日本人が数名いる。『しまった、強制労働者狩りだ』と気付いたときは頭が真っ暗になった。連行されたのは関東軍の糧秣倉庫で、麻袋入りの穀類を鉄道でソ連本国に輸送するための貨車に積み込む作業であった。

銃を持つ看視兵がいて、体を休めることもできないまま作業を続けていたとき、日本軍の下士官らしい風貌の人が「今、看視兵はおらん、全員集合！4列縦隊、前へ進め！」と号令をかけた。40人ぐらいが行進、門兵の前では「歩調をとれ、頭右！」、門兵に敬礼をした。作業が終わったものと思ったのか、門兵の答礼があり一隊は無事に隊外へ。しばらく行進を続けて安全地帯にさしかかったとたん「逃げろ！」の声があがった。一隊は、クモの子を散らすように、一目散、必死で逃げたのである。

○日本へ引揚げ

昭和21年5月、『引揚げが始まる』の報に日本人は歓喜し準備に追われた。荷物は一人リュックサック1個の制限のため、衣料品や食料品などわずかな品を詰めた。所持金も制限があり、一人当たり帰国してからの生活費千円などであった。

いよいよ、昭和21年6月、引揚げ出発の日が来た。駅に集合をして物品と身体検査（宝石、貴金属や余分な貨幣は没収）を受けて汽車に乗った。乗ったのは貨車、しかも無蓋車であった。乗ったとたん、母親は膝まづき頭を床につけて、悲痛な泣き声を上げた。中国軍に連行され行方知れずの兄への祈りでもあった。

「ごめんね、光輝一人を残して、自分たちだけが帰国するなんて、申し訳ありません。どうぞ元気で必ず日本に帰って来てね…」

父は目を閉じ無然としていたが、私は妹たちと一緒に泣いた。

「さらば、生まれ故郷よ、満州よ」。葫蘆島から軍艦の夕風号という改造された引揚げ船に乗船した。たしか、二晩ぐらい過ごしたであろうか、船酔いで苦しんだ記憶はあるが…。

「内地に近づいた」の知らせでデッキに駆け上がる。やがて、くつきり島が見えた。「あれが九州の博多だ!」「万歳!」の歓呼が続いた。私は博多沿岸の緑の美しさに感激して涙が止まらなかった。（※父は生涯かけたすべてを失い、落胆と共に栄養失調と病気で昭和22年8月の盆前に54歳で逝去、以来しばらくは食事もままならない苦難の日々が続いた。この手記では、若い女性の犠牲を目撃、私が中国軍に捕われ連行中に知り合いの中国人に弁護され助かったことなどはフィクションと思われかねないので記述していない）

出征風景

